

正幸長と始めとして鞍馬を轡を翠んとすかゝりける處は行長秀元黒田鍋島の人數もことごとく一  
 所は集り大明勢もひの外は小勢なりしを恠める折から城兵共の馳出るを見るより諸將互に一禮  
 あつて援兵の方より清正幸長等の籠城の困窮あしたる其久勞を慰るゝ籠城の人々へ今度諸將よ  
 り援兵を出し玉ふ力よりて萬死を出て一生の安きを得るは悦びと述ふりさらば是より直に揚  
 高と追撃べしとて諸手の兵軍手配りをさだめ諸鎧をわけてこれを駆く程なく明兵の後近づく  
 ば吳惟忠第國器の諸將共備をうへし蹈止りて味方の逃るを遜さんと防ぎ矢射させ散亂の兵卒をま  
 とつて心静に引退く日本の諸大將明兵の法あることと察する故窮敵みだり追へからずとて各々  
 軍をかへしける此度明人の數を盡して討れざりし偏に吳惟忠第國器が働きゆるとぞ聞えけるさ  
 れども明兵の道に乗たる馬物具鎧冑弓矢の類の路頭は満々たりければ日本人の大徳付たる心地  
 して車も載せ斗にはかりてかぞふるに暇あるべからず揚高の今度の破れし耻辱をたとへば鴨綠江  
 の水も盡して洗とも正に盡ざる汚名なりと世上は是を評判してその沙汰かくれ無りければ揚高が  
 身の罪科のはど逆れがたく見えよける

揚高退けらるゝ事

刑介すで揚高が蔚山城を責落とて能すしてあまつさへ大なる破れとなし味方の弱を生せる



事かもひの外なる憶將たりとて大に怒りことごとく大明の諸將を朝鮮國の王城に集めて謀慮とめ  
ぐらし重て日本勢と戰鬪を合すべきことと議論し且又飛馬を大明の朝廷に馳せ揚高が軍と敗るの  
罪をかぞへて其官を罷め退くべきの由と奏しける同く二月よるれば劉廷陳隣張榜鄧子龍藍芳威が  
軍を率てみな朝鮮に打入たりまた巡撫官万世徳もつて揚高よかいらしむ是明帝に命ぜらる  
の處なり刑介更も手分と定め李如梅をもつて中路大將として麻貴をもつて東路大將となし劉廷  
をもつて西路の大將となし陳隣と水路の大將となしかの兵を分つて諸城を守り日本の兵を防  
ぎける其兵士十万余人と聞えけり猶も日本の兵將朝鮮の地に住する事前後その間七年よして海上  
千百餘里の地をはなれ廿一ヶ所の城郭をかまへて持かためたる中も大將自ら大軍をもつて籠り居  
て四方へ下知を加ふるに先釜山もつて東路とし加藤清正これに向ふ順天をもつて西路となし行  
長これに住居す望津泗川を中路と定め嶋津兵庫頭父子これを下知し三ヶ所とも海をへだて、要  
害をかまへ進んで處處に大軍をもつて働き退きて馬足を休むるところとあす城の近邊に兵  
糧米を入置き倉廩多く建つ、け城地に矢櫓か楯石打棚火矢の臺まですへならべ最も防守堅  
固をなすその外海邊に家々の大船幾百艘となくこぎならべて海上の往來の自由よからん用を辨  
ぜり是等の先日蔚山の戦ひも清正機張より早船を乗浮め島山の氷の手より速かゝ押入りたりし手

柄にならつて諸將の船を海邊に打よせかのくの氷の手の備を兼て遊兵を置しと聞えけり

秀吉醒醒花見事

慶長三年戊戌の春秀吉公に京洛より座在し應善院を召され我まさは今春に北の臺を誘引し醒  
翻の花見をみさんとすまこと先年大和路や芳野の花の名残を雲今もかめてこころよかれば猶春  
毎のおもひをなほ早晩か我も老木のかげまた來ん春を待受ん覺束なき事なすやされば此たび  
の芳野の春を賞せんといふもひながら北廳や女房は深山遠境まで分け入らん枝折の途も安めらね  
ば近林の梢の花をこころよ任せて見せしめんそれ又付て洛陽の花の錦とこぎませて東西の山南  
北の岡野へ名所多しといへども中よつめて醒醒の花に取わけ色香の殊なるながめと聞ば此ところ  
こそ好からんとおもへど汝の何とかもへるぞと尋ありけるよ玄以つしんでまことおもつてこ  
の珍布は遊興たるべしとすよ顔色よろしくまからば備はやく北の廳へゆき此事をすすべしと  
有ければ玄以のやがて彼所へおもむき大間の侍使たるよしを通ずるよ北廳の伺候の尼孝藏主立出  
て玄以が演つる大間の思召を北廳へ上る北廳へ聞召し大よ湯よろこびまじし自ら湯禮のふみ  
をまたくめられさなきだよ春の心の花見んと立ちかれぬ霞の中と分させ給はんよしの音信の  
まことよ以て有がたきことなりと仰せ遣され玉ひけるこよかめて徳善院を以て淺野彈正少弼長政

増田右衛門尉長盛石田治部少輔三成長東大藏等へ秀吉公の仰せと奉り醒醒の山の花の亭を經營造  
作すべき七ヶ條を命を一つしんでそれより三寶院の内少しき壊れこれを修理し大なるやぶれ  
は是を新に造立して借また其時節を當りて院外五十町の内へ人をばらひ三町とよ弓鉄砲をつ  
らねてきびしく是を備ふまた伏見より醍醐までの路邊へ左右に緑の竹をまゝで垣を結へせたり  
その當日の饗應のころを盡して調ふべし土民旅客の往還のいさゝかさまたげあるべからずとて  
兼て仰付けられたり既に三月芳野の時花の盛りは長閑ある枝頭十分は花陰近日もありと云ふ彼山  
里の使あらねど諸役人時節を計るよ相違なけれは兼日よ至りて秀吉公へ若君北廳を透引し玉ひ并  
み付屬の女房達まで召具せらる女房達へ今日の供よ上こす晴のあるべきやと我れとらじと時の  
粧ひ美とつくし綾羅の衣花と飾れば蝴蝶の袂の追風をまはひ鶯鳥の實は木梢の芳非かと目と春の  
れん容色たり太閤すでも花亭へ入らせ玉ふては覽あるよところの花園は遊覽あるべき道筋の  
左右に五色の緞の幕と張り地は花籠としきのべたりその外櫻花のながめよろしくして暫時止  
まらんところよ諸大將茶店をかまへもさより男へ全くこれと禁じて童子といへども不通は發せ  
む或は近従の妻女等茶店をかまへ自らこれが女嬬となり赤手拭は赤前垂をつけ或は秀吉の愛妾を  
んどこへの亭女とこしらへなし艶をつくして修儲となしやすめづらしき遊興なり此店は酒

茶のよきよ傲りて秀吉公の裡を引き止めて興と促せば或は彼所の肆よの焼餅をまぬらして是非よと錢の貨をねだれて百の笑を促すありろの外近臣茶人我劣らじと新なる慰を思ひつき奇なる一遊あらんとす四方の春景淡りなく悦樂日陰の移るを去らず廣橋中納言兼勝の勅旨として入來り版慮の旨をつたえらる今日空け景氣風雨に障りなきのみならず温和の天氣くもりなきよ花を愛せるその興を思召しやらせ給ふのみとよもつて辱き勅命なれば秀吉公もまた敬んで有がたき版旨のほごを拜謝して啓させ給ふその餘の攝家大臣の家々よりおもひの使者音物風流の數を盡せば諸大名のやよふす京師大坂堺の町人世間の人々其名と呼る者今日の傍思めとして酒肴を進献せざる者なしとよ盛の榮耀たり秀吉公は父子北の廳よりして今日の主方三寶院への賜り物志なく是を引かせその上よ千石の加恩あり傍氣色尤もよろしふして終日なながめくらし給ふても名殘の興を思召せばまた來ん秋の紅葉のころをよ約束ましよて歸轅を伏見よめぐらされ後の世までも語りつたへて大開に醍醐の花見と取沙汰するに此時の事と聞えける

加藤嘉明陳隣と船軍の事

同月四日又大明の舟手の將軍陳隣が兵船數百船と揃へて唐嶋表よ寄來る日本の船手よ藤堂佐渡守高虎福島左衛門太夫正則九鬼脇坂等が輩おのの船軍を備へて相戦ふ加藤左馬助が乗たる船の

如何して後れたりけん諸手に下りて見へけるを大に怒り楫取舟頭棹取などをおふさまよまかり付波濤を押し切り舟とはしちせて明兵共と自ら鎧を合すれば佃河村政東の者共例のとふり左馬助が左右を守護して働さすて明兵數人までやよひよ水中へ切落しける嘉明が甥なる權七も從兵ともと諸とも打まじりひしよと攻寄せ船を奪ひ敵を撃餘りよ強く働くとて嘉明のあやまつて李舜臣が突出す戦を左の股よ疵を受たり李舜臣も嘉明を突けれども餘りさびしき戦ひなればとても討取かたくおもひけん他の船よ飛移り形をかしくして引退く嘉明のこれぞ敵の大將と見たる者を逃せし事の口惜さよと獅子奮憤のあるが如く大音揚て切りめぐるにはけしかりける力戦あり此時に鍋島信濃守勝茂の竹島へ打廻り順見のためよ出られしがこよ戦ひればじまりしと見るよりも鍋島やがて船を漕よせて數多の敵を討取たり中よも鍋島平左衛門茂正成富十右衛門茂安が軍兵共さびしく船を敵船よ漕付て無二無三よ突かより敵船三艘まで乗取たりその外藤堂脇坂九鬼鍋島の兵共もおもひよの分取りし船を奪ひ首を取て十分の勝を得たりける珍隣が船軍のおもひれ外よ戦ひ負け方々へ散亂漂泊したる船共をやらやくよまとひ集めて元の陣所よ引かへして後日の勝を計りけり

日未の諸將順天城軍評議の事

かくて清正秀元等諸將此たび蔚山の城普請その經營の堅牢なるべきやうを計りて相ともに是が修理と加へしむすでよその事も終りけるは海陸合せて大明百万の兵大に起り行長が籠りたる順天の城を圍んとすその風説のありければ長行も對し諸將の〳〵量見を演説するやう若し此所も遅滞して大軍のかこみうる程ならば味方の小勢如何も防ぐとも叶ふべからずその時よいたりて後悔するともまた何の益かあらんまかる時はやく順天の地を立て釜山浦を保つより及くべからず時よ加藤嘉明すゝみ出てかの〳〵の量見こと全きやうの聞えながらその始め敵をうけ戦となさんためとて籠城の覺悟したる身の今更事の起りたるやうも寄手大勢ありと聞かそれなして城を明けてこゝと去こと〳〵最も武夫の玷辱なるまこれと過ぎたることあらん諸將違ひ如何やうとも面々の量見次第よろしかるべきが嘉明一人の得こそは供ひ叶ふまじまばらく此地も止りてかゝるも引も敵の旗色の動靜を見たらんその後こそ進退を定むべけれど一座を見廻して云ければ其他の諸將もさすがは嘉明とすてゝ去んことも出来ざれば諸將の評議ふん〳〵としてその論一決せざりけり此沙汰つゆは蔚山に城も籠り居たる日本の勢へも聞えければ清正秀元相計り僧の惠瓊(安國寺と號す)をもつて順天への使者としてそれ慮りを達しける順天を退ひて釜山城を保んこと最も一理ありといふ云ながら私事をおさんたといひ進んことおの惡しからざらんか退ひて敵と

かそるゝの量見の上よりの下知なくして〳〵全く成しがたきところあるがまかる時早く使者を發して名護屋にさし圖を受給いんこそよかるべしと云おくれは行長も嘉明も此議よへたる事ありじと即刻に使者を日本に馳せ秀吉公へこの旨をうかひけるは秀吉公このれもむきを聞給ひ大に怒りを發してそれ大明の大軍が何のれそることかあらんこゝも來らば來れかし我日の本の神威を頭よ戴き何百萬の強敵なりとも打破らん何のかたきことかあらん憶病神も誘引れて城を去つてあつたしく逃れ去るの事あつたよく〳〵城地を相定めて固く守るれ意志たゞば大軍と云ふても防ぐよ何れ憂があつたん是等の事よおめてい我さきよ諫言して幾回か告げ諭すところなりしを汝等何ぞはやく是を忘れたるや殊よ未だ明兵共順天の近き所も在りといふことだも聞ざれば最もこゝろにおもひ違ひの有べからず然して清正行長義弘幸長政鍋島信濃守勝茂毛利壹岐守築紫上野介久留米藤四郎等の六万餘の兵に諸城をその儘守るべしとの餘の秀秋秀元秀家ならび四國の兵士の先まばらく歸朝して九月に至りて再び朝鮮へ渡海あるべしと仰せつかはさる此時すては慶長三年五月の沙汰と聞えけり

東山耳塚の由來の事

同く六月もなりければ秀元秀家等の諸將の既よ太閤の召あるよよつて急ぎ朝鮮の湊をはなれ數

百の歸帆を順風よまかせければ程なく難波の津に船をどゞめそれより直に伏見の新城におもむき  
 秀吉公は謁見せしめたりけるところ秀吉公の即刻の對面をもなくして先人を使として朝鮮戦地の  
 おもむきと問尋ねさてまた諸將の剛憶軍忠を抜ん出る淺深までその次第はわけ審問たゞし玉ひ  
 て後中も蔚山の救援の遲滞なるとまた順天城と明け去らんと云ひし諸將は謁見をゆるされずそ  
 の後秀元一人を召されその軍中の功あることを勞ひ賞じ玉ひまた加藤嘉明に感帖を玉はりその連  
 年の武功とくならずことよひ今度順天城退くべからずとて一人よて衆議をやぶるところの勇剛  
 なるその手抄幾許と云ふ軍忠のかぎりなく感じおもひ玉ふところありと仰せ下されけるなりさて  
 また頃年朝鮮在陣の諸將その敵人を斬獲するところの數多きをもつてこれを日本へ送らんよ鹹の  
 運漕の難儀あるを或人こゝよ思案をめぐらし討取ところの敵の首を取あつめ質檢を終りて後或の  
 鼻或の耳を削りその首數のまると定めて日本へ送りつかひしけるを秀吉公の見玉ひてその戈覺  
 ある働きを感じよるこび玉ふよより此後ハ諸將達もみなくこれよ效ふて大なる桶詰させて船  
 よ積馬よ負せて京都まで持はこぶの數あげて云ふべからず其軍實の帳面よ何某れ手よかゝて  
 誰某の耳いづく某甲の鼻幾計と記しける秀吉公乃ち諸役人よ仰付られ此耳鼻を取り集め洛外ハ東  
 山大佛殿の邊に埋ませ是を名付て耳塚と稱し後の世まで我朝の榮觀とあさんとす今あるところ耳  
 塚といへるハ此因縁と聞えけりその後ハ朝鮮人本朝へ來る時此塚に前を通る時ハその聘使の上官  
 より末官の輩迄馬乗物より下立て祭文を讀みこれを弔ひ哭泣をなし此輩死を致して國恩よ報ひ  
 し者の亡所なりとて感涙せざる者もなし

劉廷行長と誘く事

とぞよ今歲の夏も開け秋七月もなりよけり大明の大將劉廷ハ水源の地ハ屯をとゞめ順天城を攻  
 めんときたりしがこゝよ一ツの謀計を思案し吳宗道を使とし順天城に至らしめ行長よ説ける行  
 長もまたこゝろよおもひ曳くところ始より和睦の一事の絶えざれば此議よかゝていさゝか疑ふ  
 ところもなく吳宗道よ對面をけり時ハ吳宗道ハ行長よ向て云やう將軍さきよハ專らこゝろを尽し  
 て和睦の事をおもひ給ふよより其和好すよ成らんとするよ至りて破れぬること偏ハ清正が邪謀  
 を計るがゆゑによりてまこと兩國ハ本意よ違ふのよまあらず剩ハ秀吉公の怒りよ觸れ再び兵革  
 を起し來れるの事あるよよりて大明もまた止事を得ず軍勢を遠きよ出して朝鮮をすくひその軍を  
 野外よ暴せると年久しきよおよべるなりさるよよりて大明の軍將まで古郷をきたひ思ひて心よこ  
 れとさしはさめるハ上下同じき情ひたり日本の諸將達もまたなんぞ人情のかり有べきや我々の  
 おそるゝところよかゝて定めて違ひあるべからずと存するありまた其上よ兵を弱め武よけがそこ

と古より知仁の警め戒むる所はあらずや將軍豈これを思案するまよはざるべき會より覺悟あるべき一事なりこれよよつて我將劉廷これをなげき再び行長と相逢ふて舊約を繼ぎ前のちかひを修めて多くは命をすくひ軍を互よかへすよ至らば兩國はよろこびこゝろ在るかと思ふ行長はじめのうちは是を疑ふといへども宗道が辞をつくしてそれ理を深く辨舌をあらせて演べ説きけるゆゑ行長もやうやくと疎意なく是を開き承け殊よの劉廷が一驥にて馳せどもよ具するの騎歩官人どもよ是をとめて行長を相むかへんといふよより行長いよこれに寔としまからば我も會をなし約をあさんとその土地と指し日限をきめて會の期をなしけるの危かりける事どもありされども行長が運命この度つきざる處の老るしよ兼て行長が方より大明の軍中へ入置たりし間れ者朝鮮の國人宥經山といへる者この計を聞出しはやく順天よ來りて速よ行長よ告げまらするよ行長大よかどろきて劉廷とその日の會よば止めたりけり劉廷もこゝにねわて空しく本營よ立かへれり大明の監軍陳效の劉廷が謀計をなすところそれ拙ふして泄れ安きの大將の罪よあらざるやとこれを責たりけれは劉廷もふかくこれを愧たりける

刑介朝鮮よ入て手配の事

刑介再び諸將よ下知して日本の諸將の籠居れる城々よ攻撃して陥入よと手配りをなさしめてふた

び麻貴ともつて蔚山よ主さとしめ董一元の泗川の敵よ向ひしめ劉廷よ順天を手當せしめ陳隣よ水路の兵の師となすよで八月よ到りてければ麻貴の頗貴牛伯英等の諸將を率ひて温井よ陣を取蔚山に向ふといへ共清正が此城中よ在りといふこと聞くがゆゑこれを恐れてせむるよかよはず遠まきにして居たりけり清正もまた味方の小勢なるよもつて明兵に大勢よ敵しかたきを考へて守るはかりを専として出て戦はんの意のあし斯て兩軍互よ相持して空しく日をぞ送りけるこゝよ島津兵庫頭義弘息男又八郎忠恒(後よ家久と改む)の一万の兵士を率ひ朝鮮よ渡り所々よ諸城を築き我手の人衆を籠置てかたく是を守らせ我身の新築の城よもつて自身の居城と定めたりそれ新築の地形たるや三方の潮濤漫々とたんで茫々たる蒼海たり一方の陸路よつゝひて平坦なる地形たれども望津永春昆陽の三城其前よ連り亘り高く聳へたり金海固城の面の城もよその左右よ屹ち立つまた倉庫と東陽の地よかまへ多くの糧米をたくわひ置たとへり幾年籠城をすとも飢よくするしむことなからんその用意を全ふすまた銳兵すぐりて泗川の地よわめて不時の援兵たらしめたり斯て義弘の時をはからず軍よひいて陝川宜寧咸陽高靈れ所々の郡邑を剽し掠めて働さける大明中路の大將董一元高靈晋州の陸路より兵をすゝめて義弘が手當となる義弘が強勇あるよ懼りてその上城壘の要害のさびしくして容易くの窺ひがたきことをおもひけるが慢りよかゝつて攻ること

をもせず屯をといめて居たりけり

太閤葬去の事

盛なる者の必ずおとろふるの理の人間もどより遁れざるなりひと云ひながらおもひずも同年八月  
より前の關白太政大臣從一位豊臣秀吉公の假初のやうよなやみつかせ玉ひしところ同月十八日  
よ遂に醫術の手段つきて伏見の新城にて薨去なし玉ふこそ愛たてけれ今年涉壽六十三歳とぞ聞  
ける寔は一世の英雄たるその身卑賤の業より越り陋巷の居をはなれ位に萬民の上は渴仰せられ威  
武六十州を震ひなびかすのみならず猶うの餘勇をさかんに興起し民を異域に驅りたて武を萬里に  
汚すことよ至つて大度度量ありといへども仁君天心の道よおめての最も美あらぬところなるか  
なまかりとい雖も英氣の剛なるに金鐵にあらそひ廣量通らざるに雲漢をも衝ぬべし哀れあるりな  
他邦異朝の人までもさしも畏れし豪氣のはな虚しく一朝に風は散はて榮枯を半夕の露よ争ふ秀吉  
公今この極よのぞんで諸老中を召れ遺言となされけるに我すでは世の涯りと知れりそれよ就ては  
死するといふことを先まばらくこれを世間よもらすことあくして淺野長政石田三成すみやかよ築  
紫よおもむき朝鮮よ在陣の諸將共を無爲よ全く本朝よかへらしめ盡く兵を退けんこととはかれ若  
またその軍容易く引舉られまじきれやうすよ至らば徳川殿と利家の相談にてその智慮よふかく計

りて遠くおもんばかることをなし十方の軍兵どもを外國の枯骨となし玉ふべからずと云畢りそれ  
よりの兩眼を瞑まして程なく言の絶に玉へるを痛ましき事となり御尸骸を洛陽の東南阿彌陀  
が峰よ葬り甲冑兵器をも棺中よおさめたり墓を山上よきづき祠をその麓よかまへ廟を豊臣大明神  
とぞ號しける

郭國安が隠書の事

同く九月董一元の晋州よ在ながら屢謀策を運らして新塞の城を攻んとする時郭國器が廻りの兵士  
新塞の地より出来る道よして一人の女を捕へて大將國器が陣營よ連來る郭國器よすなへち此女よ  
對して如何なる者の子女妻妾たるやと尋ねれば此時女何の辞もあくして懷中より唯一紙よ書たる  
ものよ指出せり郭國器よ即ち取りて是を見るよそれ詞よ曰く  
此婦將度異域するなり吾甚憐之を捐贖以贖故土よ放ち還せるなり天朝の兵將當  
よ其窮困を恤んで殺害を加ふること勿んば蟻と救ふの徳ならん  
と認めその書尾よ吾姓氏をえらんと欲せば令公の後埋兒の父吾名と問へ或あるの口無才の按と  
書たりけり郭國器これを見るといへども更よ解するよかよはず幕中よ諸葛餘と云ものあり則ちこ  
れを見その意を早く解して云此書よ造る人よえらば郭國安といふ者ならんそれを如何んぞ察する



よその書といふ吾姓名をまうんとおもひ、令公の後埋兒の父といふこれ元郭の一字と説るなり  
 令公の唐に郭子儀を令公といふゆゑかまた子を埋むの父と書たるの郭居が母をやしなひかね其子  
 を土に埋めんとしたりける孝行れ者の古事なり凡俗の末々まで世に知り安きふることを取合せ  
 て一字の姓を註したりまた或あるの口は國の字才なきの按の字の偏傍を別て見れば安の字よ  
 ひあらざるやこゝをとつて考へたりと云ければ第國器史無用等大よよろこび其安國の今日本の陣  
 中よありと聞り今此帖を示せるは是我兵を導ひて新築を破らんとその事あふんざらばその返事をま  
 たため遣り國安と約束となすべしと商賣の町人三人その智の小賢しき者を選んで使とし潜ふ史無  
 用が書翰と取りもたせ望津の地に往て國安に對面し委曲の旨と談せしむ國安乃ちこの使よ約をな  
 し今月二十日の日限をとつて望津城中の糧粟をこゝろく焼却すべしその火と相圖とし騒ぎよ乘  
 じて攻入給へと云ひかくる使商のはやく到りかへりて國安が返帖をさし出せば二將の大よよろこ  
 び約したる期を待たりける

第國器望津を乗取る事

同月廿日よなりければ第國器の今日こそ國安が約束の日なりとて曉天よ人馬の糧餉とつかひ兵士  
 の備を正去て河と渡りて戦ひと交へんとす日本勢のこれを見るより兵士を出して拒ぎをなす兩陣

互に戦ひを合せいまだ勝負も未れざるころは望津城の上よ當つて忽ちよ火ありと騒ぐ日本の軍  
 人これと見るより先立かへりて火を救へとて兵を引上げ城よ入らんと馳たりける國朝のこゝぞと  
 勝よ乘じ望津城よ攻入たり早く兵卒を分つて同じく放火せしめれば餘煙天をかぞめ一時の烟と  
 燒あがる望津の城郭二ヶ所軍士の陣營二千餘間の忽ち燒失たりけり董一元は是と見るより兵と  
 分ち將を下知してその日の申の刻ばかり同じく島津が人衆を籠置たる永春の城よ取懸不意よ襲て  
 これを破り近隣の在家くよ火と放ち燒討よぞなしたりけるその夜よ入てまた急よ昆陽を攻め撃  
 て速に陥入れんと戦ひける折ふし廿日の夜の月阿なく照し白晝よひとしければ互よ兵と合せて相  
 戦ふ島津が兵士の勇をふるひ戦ふゆゑ敵軍の士卒の首を斬取こと頗る多きよ到れども大明の大  
 勢切をも突をもことよせず味方の死人を乗越手負を引のけ無二無三よ攻立る嶋津が兵士こゝろ  
 の勇よ働けども味方とくらふれば多少尤も儂ひざるの小勢なれば今日ばかりの軍にあらす懸引時  
 よまたがふべしとして昆陽をすて去り泗川をうたく守りける

董一元島津を誘く事

こゝよ放て董一元の兵士をあつめ義弘と戦はんとして島津が籠れる新塞れ城よ取かゝる島津が家の  
 はやりをの若殿原この有さまと見るよりも門關をひらひて切て出唐人原を打ちらし先度の耻をす

いぐべしと手くすね引て勇み進めりされども義弘のもとより老功の大將たれば少しも是れ取合すはやり雄の若殿原を制していらく敵の多兵我士の小勢小をもつて大敵せんこと是ぞ兵家の一難なりこゝよおめて謀慮と廻らさず卒爾と戦ひをおこしなばこれ後のわざひあつんみだりも働くべきよあつず彼が軍きたりて城とせむるの時に至りその戦ひを一舉に決して明兵をつくすべきぞと警めといめ鳴を潜めて音をもあさずこゝよまた董一元の一謀計をかまへ第國科を(國器が家族也)使となして島津がこもれる新築の城よいたらしめ義弘と説んと多くの金帛ともたせやる茅國科すでよ新築の城門よ到りわづかよ四五人の從者を召具し城門を欸ひて董一元が方よりの使なりといふよよりその旨を大將の本陣よつたふるに明て入れよと下知あるゆゑ門をば相違なく通しけり義弘の何事の使ぞと茅國科よ對面と國科の義弘よ向ひてさま〜と辨舌とつくとがうゑ關白の味方をすて、明朝へ味方をなせさいわひよ薩州の日本の西邊よ國をあし海陸遠境れところあればそむけりとも容易よのとがめ討こと叶ふべからすまた琉球國よ近ければ大明國より救ひをなるとよ順路たり此度我いふところの計をもちひて和睦まつたく調ふならば大明國より兵馬を出し將軍の味方をなざり日本の秀吉等を征伐すること安からんとぞ進めける義弘聞てあざ笑ひおのの思ひよりのよきやうなれど日本の武士のならひよして一端他人と約をなし味方をなす上かゝつたと

ひば此身の粉よくだかれ鯨鯢れ食よなるとても形をおしむことなく名のみおもふの我國に耻しむる武士の風俗たり貴方よ人の味方する者が已が利欲の合手よひかれて二心ある者と能と沙汰しひや義弘におめて得て合点いたさねと董一元が音物ともこと〜かへして受けざれを國科の面目を失ひて早々よ城を出よけり

義弘董一元と合戦の事

董一元の謀をもつて義弘を誘うんとまたれどもその機おもひの外なればしからば只よ打棄て置べき事よあらずすみやかに撃ち果せとて廿八日の夜半ばかりよ潜かよ兵をあつめて先づ四川の城よ襲いんとす此時よ義弘が兵士の四川よあるもの總よ三百餘騎ばかりなり董一元か騎馬の將李寧自己の勇氣よ傲り一手柄せんとやおもひけん衆將よさき立ちとんで馳せ四川城の下よ抜かけせしを城兵共これを見るより這打殺せとひしめきて木戸をおし開ひて切て出おつとり籠て撃殺せし心地よかりし事どもなり大明の後軍とてよ寄んとまたれ共李寧が備のあへなく敗れたるを見るより少し思惟に渡りて進み兼てぞ有よけるやうやく廿九日れ曙よ至り董一元が兵軍備をすゝめて四川の城下よ到りこれを攻んとするを見るより城兵ども其圍かとうけんことをおるれてはやく新塞よ人をつかりし援兵と乞ひんがためよ使を發しさせその後よ兵士三百餘騎一同よ櫓をなすべ城

門とひらき斬て出て奮ひ戦ふ大明の堯將盧得功ハ忽ち鳥銃よあたつて倒れたりそれ手の士卒大  
 亂れ立を見て城兵大勝よ乗じて防ぎ戦ふところ董一元か軍兵共ハはやそで四川の城中よ  
 攻入りて火と放つ新塞よ有ける鳥津か兵士五六百騎この有さまを見るより四川よ到りて援んと  
 云けるを義弘聞てこれをかたくとめて云やうまよ四川の兵をすてんこと忍びざることをな  
 ぐまかりといへども彼大軍その勢ひよ乗じて再びこの新塞まで入らんとさきハ我軍大いよ破れぬべ  
 し兎よ角よその營と守つて敢て出ること無よこのゆることあるべからずといへると義弘が家臣よ  
 伊勢兵部少輔貞昌といへる者この旨を聞といへども眼前よ敵のためよ逼らるゝ味方を見ながら是  
 を救ひざるハ勇士の正に醜るところなりと云て自己の手の者共を引上馬をおどらせてとみ行  
 四川の城兵はや城を破られたれ共一人も討取られず敵の中を殺り破つて逃れ来るを貞昌途中よ  
 て出合て相ども新塞さしてかへりけるすでよ明兵共東陽の糧庫の地までを焼はらひ進んで新塞  
 を攻んとこそあしたりける

義弘賊耳を贈る事

既よ明兵の新塞ちかく押寄ると聞えしかば鳴津又八郎忠恒すゝんでこれと追ひはらんとした  
 りける義弘大よ叱つて云ふ汝敵兵の多少としらざるばかならず戦ひを挑むことなかれといふ軍戒  
 をしらざるや謀よ拙みくして如何ぞ大將となるべきと是よりて又八郎も兵を出すことをば止  
 めたりける夜の夜よ入て明兵共いかゝもひけん濶よ圍みを解て皆々泗川かへりける忠恒等こ  
 れと聞てかゝるべしとしるならハ速よ董一元と戦かひざりしことの口おしさと後悔よぞなした  
 りける同十月朔日董一元ハ第國器業邦榮彭信古よ令して歩兵三列と郭三聘師道立馬呈文藍芳威の  
 馬武者四隊とつかひし新塞の城を攻させ國器邦榮信古の三列ハ既よ塞城の壁壘の下よ到り木楫と  
 いふ火攻具をまかけ城門の扉を破らんとするよ時よ木楫やぶれ火具よ火移り黒烟たなびき渡りて  
 明兵を打やぶることさながら風よ木の葉を散すが如くよして明兵これハ騒動するを義弘すかさず  
 その機よ乗じて門と八文字よおし開き討て出れば明兵大よ亂れ立て逃れ走るを忠恒もまた兵を引  
 て討て出て彭信古が三千の兵と打拂つて是をやぶるよこれも大よ潰るとき忠恒左右の騎馬よ下知  
 し良馬よ鞭を加へて從横無盡よ乗仆せば元より亂れ立たる明兵共こよよてハ脚仆され彼所よてハ  
 蹶仆されて起もあからぬ所と忠恒が跡よつゞける歩兵共騎馬よつゞゐて駈入て起しも立せず切殺  
 そハ目も當ふれぬ事どもなりかくの如くなれば三千の歩兵どもわづかよ五六百人ばかりを助りけ  
 る郭三聘師道が備もとも崩れて引退く國器邦榮これを見て察とるよ城中の兵卒みあゝ外よ  
 ち出たれば内よハ兵有まじきを早く城と乗取べしとして一万餘人の騎兵と督し兩將ひとしく進んで

城は向ひけり義弘が城は残せる五千の兵大に呼んで競ひ討てば明兵もまた死を忘れて相戦ふうく  
 て時うつるまで挑み戦ひけるが爰ふてもまた明兵千餘人討れけるゆゑつゝぬゝの奇手の負軍となつ  
 て一度もつと敗亡せり藍芳威もまたも崩れ引立られてこれも同じく逃げ走りける董一元の  
 再び諸將をばげまし軍を旋らして後再びこれを攻んとするの相談せり中軍の大將徐世卿の味方の  
 人数の崩れ立て川を越ゆるを見るといへども猶軍を備ひて望津の屯を去りしと義弘が兵騎をも  
 無二無三と徐世卿が軍勢と討破り大將徐世卿をば生ながら是をとりへて斬たりけるこゝに至つて  
 明兵再び敗走して死亡する者幾千万といふ數をらす嶋津が兵士川と渡りて此勢ひも乗じて大明勢  
 の種とたゝんと憤るを義弘こゝも令を下して逃る敵を諷り追ふべからずとて各々備をたてな  
 し速に城中に入ひける此度義弘が手は撃取ところの首數三万餘級と聞えけりことゝく是が耳鼻  
 を切て大樽よつめさせて日本へ贈りけるこれよりして明人も朝鮮もいよゝままんづが（嶋津を  
 ままんづといふ）威風よぞおそれける

淺野石田朝鮮渡海の日本勢を迎ふ事

かくて淺野彈正少弼石田治部少輔の徳川公の台命を承たまはり筑前の國新加臺に至り先達て使者  
 を朝鮮國よつかりし秀吉公の薨し給ふ由と告げ諸將と評議をなし何とぞはやく歸朝せらるべきの  
 趣きをつたへける郭國安はやくこの説を聞出し往て明人よこそ告たりけるされども前日義弘と  
 戦つて大なる負け軍を仕出し士卒大勢討れけるゆゑ急な戦ひを出すべきの伎倆もなくおそれ入て  
 居たりけり爰よかゝて神君の藤堂佐渡守高虎を朝鮮國に遣りされその戦ひの形勢と窺ひしめ給ひ  
 これと引取のやうとかんがへさせ給ふところ島津義弘が軍の人数明人と戦つて大なる利を得るの  
 勢ひあれば諸將を引取よもまた難かるべからざるのちもむきを言上す石田淺野が輩もまた夕  
 よ歸り参り伏見よかゝて此旨を中上たりければ神君のちのちのやすところを聴しめし大よほよ  
 ろこびまゝ〜ける

日本勢軍をかへす評議の事

日本の諸將のちのち相談を相定めて所々の軍城を引拂つて歸帆とすでも相催すの由大明の軍中よ  
 そのきたれば大明船手の大將陳隣朝鮮の大將李舜臣の此由を聞よりも五千餘人の人数をもつて  
 日本の軍兵は歸路をとめてことゝく是と討とめよと下知なしたりける刑介もまた此由を聞よ  
 りも海路の人数の小勢あらんことをおもふゆゑ副總兵官鄧子龍遊擊馬文煥李金張長相おんど  
 いへる義將よ人数を相添以上一万三千人の兵卒と戰艦數百艘をとのへ忠清道全羅道慶尙道海  
 口よ大船をよかけならべて日夜番手をきひしく遠見の船を出して日本船の歸帆の影朝鮮の海々

をおし出すと見るあらば早く注進せよとぞ下知しける日本船今までの三道の海濱さへ入りなく船の往來自由なりしもかへりける後の陳璘がためよさへぎり止められ小船の通路かへり止まつて海上の道の絶果たり大明の兵船ながら城近く軍人と寄せざれば戦ひのことのこれなくして空しく日をぞ送りける大明の軍中より陳璘が數人を分つて加德巨濟鼓金島をつかひし彌日本軍の船の通路をといめんとす此時鄧子龍の鼓金ありけるが浙江等の兵士は命じ義州より兵糧米を運漕して鼓金の地に入らんとせしが九月廿九日よあつて海上は風起り浪狂して五十餘艘の船も大半まづんで全く助かる船のあし纒五六艘こそ残りけれ同十月に至り經理官人萬世徳も朝鮮の加勢として數万の新手を引つれ大明より到來すといへども大明諸將の謀計すでも定りける上の別ふ一段なすべきことのかかりしうば新の文を相認日本陣中の諸將は方へ送りつかひして云けるの太閤すても死をといへば速に兵を引て日本へ歸棹をどれまかざる時よあつて甲を解て降参せよさあくんば片甲と云ども生て日本へかへすことをなすべからずといふはた第國器も島津義弘をあざむき重てこれを計りおふせて日本諸將のろの中と引はあれけるやうよなしのりける此如く大明の諸將共秀吉公の薨去のことと如何してはやく知りたりけんを尋ねれば郭國安義弘が軍中よ居あかす大明の軍將共の内通となつて日本陣中の軍事よあつて委細よこれを通ずる故なり

けりまた此度もひそかよ人をつかひして日本の兵將のたて籠るところの城々すでも兵糧米をつたつきたり殊よこの頃その國大いなる凶事疲困の事あればかの近日兵を引てかへるべし近來清正兵糧つき義弘方へ借りたき旨を云送りけれども義弘が城中とても同じく乏少よ到るがゆゑよこれと借す釜山城の中のみ兵糧をつたつた外の城々に盡く糧よつたりたりこれよよつて問者を釜山の城よ入れ日本の兵糧倉を焼からば餉糧よつたりて日本勢のいよ早く引去るべしと内通をなしたりける

李舜臣戦死の事

こゝよあつて日本の諸大將の互に使者と通じ相談を一決し日本渡海の議よあつてかの一所よ時日を定め朝鮮國の湊を出船とべしと相定むれば清正の蔚山城の海岸よ遠ふくして出船の通路あしきをもちて先蔚山の人數と引除ひ機張をさしてかへりければまた嶋津が勢も四川城を徹去りぬ并よ行長もすでも順天を引拂ひ近日渡海の出船と促すこと大明水路の斥候共何か此事を聞出してはやく陳璘が軍中よかへり來つて當十月十六日島津小西が両手れ兵渡海の帆をめぐると定る間は油断あるべからずと告げ報じける陳璘聞て大に悦び日本人を討て功と立てん此時なりかの油断すべからずと諸手の軍船よ觸れ聞せ大明の船大將鄧子龍と朝鮮の船手李統制舜臣と両

手合せて千餘の兵をつかりし則ちこの兵を分つて三ツの大船に打乗て大明物手の先陣として鼓金島よりおし出し日本船の帆の見ゆるを今やれそしと待かけたりこゝにまた小西攝津守行長の居城を順天府の中丙橋といふところよきづき定めて堅固な城と守りけるを大明の大將劉廷ハ此ところの手當なりしゆゑ何とぞ行長が籠りたる城を追ふとして大功をたてんとおもふにより大兵をすぐつて幾回かこの城と取かこみ攻戦ふといへとも其要害のよきが上は籠れる大將良雄もして士卒もまた精けたる勇猛の者なれば如何はを力盡してせむるといへども利あらざれハ劉廷も今これを攻めぐんで遂に其かこみを解き順天府の府内よかへりて數日をむあしく送りけりかくて再び兵をすゝめて丙橋と攻んとするに當りて小西が兵ハ日本の諸將すでは渡海とべき約速の時節もありしかば兵船の帆をはしらせて海上に乘出せば陸戦につめよやみたりける大明の兵船すでは日本船をととめんと出向ふ島津が兵船ハすでは行すきて小西が兵船よ出合たり鄧子龍ハ第一の功名せんと進み討て小西が兵船よ火矢を射かけて焚立て多くの船を切取れば小西が兵船大に破れて撃取らる者も多かりけり大明の船とも大に勝よ乘するまゝ南海の界まで小西が兵船を猶撃とらんと進みける李舜臣も自ら矢石を侵して攻戦ふ小西が二の手の船中より大石火矢を打かけたれば鄧子龍が乗たる船よおもひがけすも打あて、帆柱を打折り楫と碎けりこれよよつて子龍が船濤に漂ひゆく



るところを小西が兵船これを見すまし速に子龍が船に乗付て子龍をばじめ一船に乗たる二百餘人  
れ者とも一人ものこらす討取たり大明の者共この有さまを辟易して既取れとなさんとす舜臣  
も鉄砲の飛丸の飛來りてその胸にあたりて後づと通りければ何かのもつてたまるべき船中  
堂を仆れしと左右の者どもたすけ起し後軍の樓舟の帳中に入たりければ痛手なれはすて死す  
よ到りて云やうまとも其戦ひの急なるに至れば我今こゝに死すといふ共つしんで我死を云て味  
方の者も洩らし聞かせることなかれと云やんで命を絶ぬるとおしまぬものこそなかりけれ

李元陳隣を救ふ事

爰に舜臣が兄の子李元といへる者素より膽の大にしてその器量ある者なりけるが叔父の遺言をか  
たく守り舜臣が死とふかく隠して他ももらすことなく猶を戦ふその戦闘ますし急なりしかば  
小西もこゝに力戦して大明の軍船第一第二の手を破るゆる第三に陳隣が舟を押取かこんで攻  
立る陳隣が兵船もすて危く見へたるころへ李元は遙にこれと望み見てその手の兵船を下知し  
て鉄砲火矢をまきり打かけたれば小西が兵船此手の戦ひより破られ兵士大に乱れ立を李元が  
軍兵勢ひに乗じて攻討ければ陳隣もまたこれより力を得て大に兵船をすゝめて小西の軍へよて  
遂に散々打なざる行長が兵を以て陳隣李元かため討る者二百餘人と聞えけり二百餘艘の船

どもことごとく焼きつめたるれば行長今の詮方なくやうくは鼓金の岸に逃げのほる鼓金の敵兵  
 守りのために残れる者も老弱の類にしてまかも大勢もあらざりけるを小西下知し一拍子攻入  
 り何の手もなく此城を乗取つてまばゆくこゝに休息するゆゑ今の命生たる心地のしなから船ども  
 そへて焼れけるゆゑ逃れかへるへきやうもなしかくて陳隣に李元が船手より此度救ひの兵を出し  
 けるゆゑ危きところを遁るゝのまなすあまつさへ小西が兵船を数艘乗取やき破り十分の勝利を  
 得たることひとへに舜臣が力をあはせて力戦なしたるゆゑなりと大およろこび速使を立て此度  
 の救援猶もつて神妙のことなりと大に感じ云おくれは李元の使者も出合ひ舜臣が討死したるかも  
 むきと委細は語りて愁涙を流しけると使者もこれを聞いて大おどろき感涙をどめかねたりそれ  
 より急ぎ陳隣の方へ立かへりて舜臣が死する時れ遺言までつぶさに語りつくるは陳隣の餘りよお  
 どろきその憂恨おたへずして此ことと聞とひとしくあつと云ひて自ら上り居たる椅子の上より地  
 よ仆れ胸を打て大聲を發して大に慟哭したりけるは一軍の將卒までわつと云て愁歎するよその聲  
 海波を震ひてかなしませざる者もなし是みな舜臣が多年は自己の私なく人をあわれみ他どかなしみ  
 て兵士旅泊の輩まで恩恵ふかき其情は人心を感ぜしむるか深きころよりなせしところを聞えけ  
 り其後この所を往來する商旅の民に至るまで寄集りて舜臣が廟を立て四時の祭りおこたらす今の

世までも猶靈神とやまひける

行長兵士鼓金島に困めらるゝ事

大明の將陳隣が一手の兵船すでに行長と船たゝかひは勝と得るゆゑ夫より再び大兵を合せ行長  
 が兵士を鼓金嶋まで追上四方より大船共を取あつめ二重三重に追取まけば逃れ出べきやうもなく  
 籠島の雲を乞ひ塞へたる驥の千里をおもふか如くなりされども行長が乗たる船一艘の舳子よく兵  
 士もよく宗徒の軍兵乗たるゆゑこの船をかりさしも大勢の敵兵の中をおし破り先だつて島津勢の  
 着し加徳嶋まで逃げ來る島津が後陣五百餘騎も猶いまだ馳せ來らず是も小西が手は者と大明勢よ  
 さへぎられしや覺束なきこと共あり兎角そのやうすを見來つて救ひの兵を出さべしとて伊勢兵部  
 少輔の手の者すくつて二百人ばかりと早船三四艘に打のせ自ら物見をなしたりけり既ば鼓金島の  
 近き酒よせのやうを窺ふお海岸の淺の方より大明の大船をかけあつてありけるゆゑなう  
 へ小勢にて寄すへきやうなかりけり兵部少輔士卒をとめて云やう斯ていなかゝかなふ  
 べらうす日の暮るを待べしと澳よかゝつて近よらすその日れ暮を待つけたり日もやかて暮ければ  
 ひそか島の後まはり切岸の下に船をよせ城に向つて喚はるは城の内も聞つけて城門の戸ひ  
 らを開き島津小西の兵士ども何れも爰もありはやくもうひの船とたびい得と聲々歡び喚はりけ



れば兵部少輔の急ぎ船艦を早めて馳かへりまかしの由を告げれば島津小西も同心して急ぎむかひの船をこしらへ敷多くつかひしけるこの島大手の舟岸をば陳鑑がかためけるが中軍船手の將陶明宰小西等が船と追ひんとして鉄砲もあつて戦死するゆゑ陳鑑もそれより大船をも下知して鼓金島と取巻たる兵をとき海上はるか酒かへして重ねて敵と追ひんとせざりしゆゑ日本の諸將のそれよりこゝろやすく船とかへし朝鮮を事ゆゑを引はらつて歸朝せりこの時神君の徳永法印豊昌宮城長次郎豊盛を副使として諸將の軍をかへすべきの台命あるより各々命をつしんでうけたまはり清正行長義弘直茂幸長等の諸將みまへて凱歌を唱へそれより封馬に至り覇家臺よつきて清正と會合す清正の先だつて名島もかもむき淺野彈正と相違てそれより淺野と手をたづさへて覇家臺まで来りけり

歸軍の諸將伏見に到る事

かくて翌日に至つて淺野石田の人々の清正行長等の諸將をあつめ在陣の間多年の辛苦を経たることと勞ひ且また秀吉公の謬選言と告げ其品々を遺物を語り傳ふれば諸將のみなく感涙と流し流涕ととゞめ兼てぞ見へよけるまばらくあつて石田淺野の兩人諸將もひかひまづ伏見におもむひてその後本國より一り累年の困みをはらし給ふべし來年上京の日に至れば茶の會も

も催ふして互よその情となくさめんと云けるを清正と石田といふもとより不和のことなればこの言を聞き清正はすゝみ出て高聲に呼ひつて諸將のまとも茶をさびめても酒盛もてもこゝろよまかせておし給ふべし某等の陣營を朝鮮よとむるとすでも七年ありざるよよつて瓶よつめる米粟なく糞一錢の儲けなし何をもつてか茶もめてん元より酒もあつてころ唯稗劑をもつて諸將達と變應といたさんとあて言を云ひけるよ石田のことも耳もたてこれと疾むといへども問答するよもおよはずして遂よその座を立伏見をさして上りけるこゝは徳川神君を謁見し奉りその後おれ歸國を催すべきの仰せありけるが惟り義弘が手扱武功とかんじ思召四万石の新領をば加恩ある當時これと見るともがら羨むるのなかりける秀吉公平生自らその名をまける者なれば貴となく賤となく男女僧俗をへだてずその遺命あり刀劍金銀器財等までおのゝその差よこれをまかせてくばり與ふるのさながら寶山を重ねる如くなるのひたしき事どもなり朝鮮在陣の諸將をはじめ士卒するに至るまでそれより己が古郷よかへり多年の勞苦を休息す家をつぎ名と傳ふ我神州の英名を異域よ光輝し其成功を万世の史籍よ残す實よ武門の龜鑑と云べし

明治十八年十月二日御届

編輯人

# 出版人

京橋區鎗屋町拾四番地

野村銀次郎

不詳

定價金二圓

# 大 賣 捌 所

日本橋區横山町三丁目

京橋區 尾張町

日本橋區横山町三丁目

京橋區 南鍋町

日本橋區馬喰町三丁目

同區 藥研堀町

京橋區南傳馬町

日本橋區通リ三丁目

辻岡文助

上田榮三郎

鶴聲社

兔屋誠

山口屋藤兵衛

鈴木喜右衛門

春陽堂

丸屋鉄二郎

府下及諸縣賣捌所

東京芝三島町

山中市兵衛

同 地藏町四丁目

田中兵太郎

高崎柳川町

柳 風 舍

越後長岡裏一の町書林大橋新太郎

横濱太田町二丁目

伊勢屋梅藏

常陸土浦田宿町

柳且堂本店

大坂本町四丁目

岡島 眞七

甲府常盤町

内藤傳右衛門

同 備後町四丁目

同 支 店

同 八日町二丁目

西川庄右衛門

同 心齋橋平野町

前田庄三郎

阿州徳島中通町

坂井 萬吉

尾州名古屋本町二丁目石 版 舍

加賀國金澤尾張町

牧野 作平

同 玉屋町三丁目

永樂屋東四郎

伊勢國津京口丁書林

郁 文 堂

陸前仙臺大町四丁目

木村 文助

静岡傳馬町

北川屋茂 衛門

陸前石ノ巻

三陸屋利兵衛

同 札の辻角

長谷川金七郎

函館大町

常野嘉兵衛

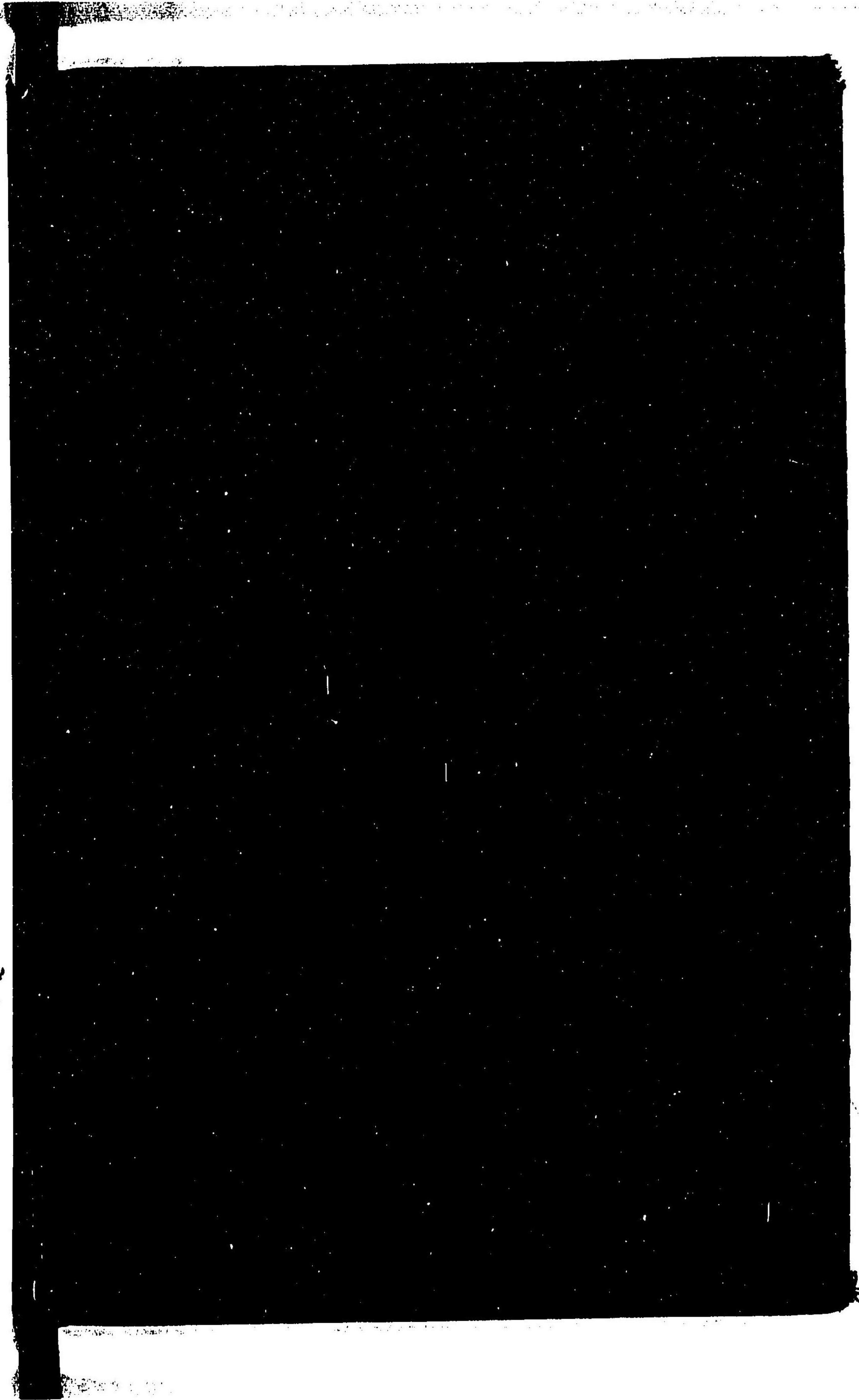
仙臺國分町

佐藤屋 阿部勘右衛門

31

/

31





205257-000-5

特69-438

朝鮮軍記

野村銀次郎

M18

EDV-0316



